

## 幼児と児童の類似題材による造形活動について

Formative activities by kindergarteners and elementary school students using similar subjects

中 田 稔

キーワード：造形遊び、遊びの要素、図画工作科

### はじめに

平成 21 年 4 月から実施されている新しい幼稚園教育要領では、小学校教育との円滑な接続のために連携を図るようにする内容が示されている。<sup>1)</sup>また、平成 23 年 4 月から完全実施された小学校学習指導要領でも、幼稚園や保育所との連携や、幼稚園教育の内容との関連が示されている。<sup>2)</sup>特に近年では、幼稚園と小学校だけではなく、保育所も含めた三者の連携が求められるようになってきている。そして、その連携の在り方としては、小学校と幼稚園、保育所との間での教師同士、保育士との意見交換や合同の研修会の開催などが提起されている。また、子ども同士の交流として、幼稚園や保育所と学校行事を合同開催したり、相互に訪問したりするなどの交流の方法も考えられている。さらに小学校においては、生活科、国語科、音楽科、図画工作科での合科的な指導の工夫や、幼稚園教育における内容との関連を考慮した指導も求められている。

例えば、図画工作科では、学習指導要領「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」において、「1 (5) 低学年においては、生活科などとの関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすること。特に第1 学年においては、幼稚園教育における表現に関する内容などとの関連を考慮すること。」とある。つまり、幼児期と同じような発達特性を持つ小学校低学年の児童について、幼稚園教育での表現領域に関する内容との

関連を図ることの必要性が明記されている。

このように特に「小1 プロブレム」と呼ばれるような課題が存在する小学校1 年生において、教科内容と保育内容についても、異校種間での連携が求められている。しかし、幼児期から小学校6 年間の長いスパンで子どもの造形活動を考えたとき、図画工作科においては、むしろ幼児と低学年児童との段差の解消よりも、中学年以降の段差をどう解消するかの方が、大きな問題であるように思えてならない。

それは見方を変えれば、幼児期から小学校低学年にかけて抵抗なく行われて来た造形遊びが、中学年あたりから沈滞し、高学年になるとさらに取り組まれていない状況から想像される問題であると言ってもよいかもしれない。

そこで本稿は、幼稚園と小学校との連携を、低学年の一時期のみに焦点を置いて論じるのではなく、小学校高学年までも見据えた形で展開できるような図画工作科における題材開発の可能性を探るための実践と、その意図について論じるものである。

### 造形遊びの「遊び」の要素

幼稚園と小学校の連携した造形活動の題材を考える場合、やはり基本ラインとなるのは、遊びを中心とした幼児の造形活動から、図画工作科での造形遊びへとという流れである。それは、小学校学習指導要領の教科内容として「遊び」という文言が用いられている教科

は、図画工作科と体育科だけであるという状況からも、遊びという言葉に親和性が高い教科の特色が生きて考えられるからである。

しかし、小学校における造形遊びの課題として、しばしば散見されるのが、その学習の根本的な価値を巡るものである。例えば、西村隆司が平成17年に行った研究の中の「公立小学校教員の美術教育に対するアンケート」<sup>9)</sup>で、「これから造形遊びの授業をやりうと思いますか。」という質問に対して、「図工の時間にわざわざしなくても普通の遊びの中で取り入れたらいいと思う。」という回答に代表されるように、造形遊びを学習として行う意味について否定的な見方が、現場の教師の間に根強くある。

一方、幼稚園では、幼稚園教育要領 第1章総則に「2 幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として第2章に示すねらいが総合的に達成されるようにすること」とあるように、遊びと学びを同一のものとして捉え、遊びそのものの持つ価値が高く評価されている。

このことからしても、造形遊びの「遊び」とは何かを今一度整理し、その価値を確認した上で、幼児と児童の題材開発に臨む必要があると考える。

そこでまず、幼稚園での遊びが発達段階に応じたねらいをもって行われる様に、小学校での造形遊びも、学習課程に則って行われる以上、放課後の公園での自由遊びとは異なる「遊び」であることが強調されなければならない。つまり、遊び＝学びであり、造形遊びの「遊び」の要素は、そのまま造形遊びの学習のねらいになると考える。そこで筆者は、これを以下のように考えた。

まず1つは、主に材料を並べたり、積んだり、つないだりする行為を繰り返す行いからイメージを喚起して活動に取り組む造形遊びに見られる「構成遊び」的な遊びの要素である。この活動では、材料を基に構成することから自分なりの並べ方やつなぎ方の意図を楽しむことが、遊びの楽しさとして考えられる。また、手の巧緻性を高めるという学習のねらいや、達成感や

成就感を味わわせるというねらいも想定できる造形遊びである。教科書の題材例としては、「ならべてつんで」（日本文教出版「ずがこうさく」1・2年上）などが挙げられる。

2つめは、造形遊びに見られる「感触遊び」的要素である。例えば「すなやつちとなかよし」（前掲書）のように、手だけではなく、体全体の感覚を通して砂や粘土、時には水などの材料と関わり、その感触を楽しむ活動に見られる要素である。乳幼児期に特に重視される感覚を刺激する遊びから繋がる要素のある造形遊びで、心情的な面で解放感や安心感を求めることができる活動が展開される。

そしてもう1つが、「ごっこ遊び」的要素である。これは、例えば材料を使って、自分自身が何かに変身することや、高学年では場の雰囲気を変えたり、材料を何かに見立てたりすることを楽しむ造形遊びに見られる要素である。活動を通して仲間との交流や一体感が生まれ易い遊びの楽しさを持つ造形遊びである。教科書の題材例で言えば「風が見えたら」（日本文教出版「図画工作」5・6年上）などが代表的なものである。

大まかに造形遊びの「遊び」の要素をこのように整理してみると、題材を開発したり、授業を行って評価をしたりする上でのポイントがはっきりする。もちろん、子どもの実際の活動の中で、これら3つの要素が複合的に、或は流動的に現われることは当然ではあるが、遊び＝学習と捉えて、造形遊びを放任主義にしないためには大切な視点だと考えている。

### 「遊びこむ」姿と類似題材の設定

保育現場でよく「遊びこむ」という言葉を耳にする。保育者が、子どもたちの様子を見たときに、遊びに夢中になり、没頭している状態の時によく使われる言葉である。題材を設定するにあたっては、子どもたちが正に遊びこめるようなものを提供したいと考える。

そこで、より具体的に子どもが遊びこむ姿とは、どのようなものであるかを考えたとき、以下のような姿が思い浮かぶ。

①同じ遊びを何度も繰り返し楽しむ姿。

乳児の「いない、いない、ばあ」の繰り返しを楽しむ姿や、ものを入れる、落とす、拾うなどを繰り返す姿などに見られる。

②ものに出会い、探索する事で確かめたり発見したりすることを楽しむ姿。

乳幼児が新しい玩具やものを手や口で確かめながら遊ぶ姿や、自然の中で嬉々として活動する姿などに見られる。

③自分以外の何かになって、ごっこ遊びを楽しむ姿。

大人の行動を模倣して楽しんだり、ままごと遊びでお母さん役になって楽しんだりする姿などに見られる。

このように幼児が「遊びこむ」状態と、前述した造形遊びの要素を交錯させると、①の繰り返して遊ぶ姿は、並べたり、積んだり、つないだりする構造的な遊びの要素と繋がる。また、②の探索し、確認し、発見する行為は、体全体の感覚を通してものと触れ合う感触遊び的な遊びの要素と繋がる。さらに、③のごっこ遊びを楽しむ姿は、造形遊びのごっこ的な遊びの要素そのものである。

そこで、遊び＝学びから見た遊びの要素がきちんと入った題材であれば、幼児にとっても十分に遊びこむことが可能ではないかと考えた。

そして、このような遊びの要素をもとに、いくつかの題材を検討した結果、幼児と児童に共通の造形行為が生まれる「型押し遊び」を実施することにした。

型押し遊び（スタンピング）は、リズムカルに連続して型を押す行為を楽しむという点からすると、構成遊び的な要素の強い造形遊びである。ものの形を「地」に押し付けて楽しむ遊びであるが、「地」が紙であれば、型として使うものに絵の具などを付け、ペタペタと繰り返し押していくことで楽しい表現が可能である。また、直接手指に絵の具をつけて手形を押したり、砂場に自分の足跡をつけたりする型押し遊びであれば、感触遊び的な要素も考えられる。さらに、型押しをした形を何かに見立てて表現することもあるが、このような場合は、ごっこ遊び的な遊びの要素も働いている

と考えてよいだろう。

このように型押し遊びは、構成遊び的な要素を中心として、遊びの要素を十分に持った題材であると考えられる。

そこで本実践では幼児、児童とも共通に型押しができる「地」となるものとして、紙粘土を選択した。粘土は可塑性に富み、造形遊びにはよく使用される材料であるが、今回粘土の中でも特に、紙粘土を選択した理由の1つとして、型押しした跡を写し取るという活動まで計画したため、着色できる材料が必要であったことが挙げられる。また、小学校で実践に協力してもらえる所を探すのが困難なため、ギャラリーを利用してワークショップ形式で行うことにした。そのため、土粘土等、周囲を汚す恐れのある材料の使用ができないことや、グループでの活動が難しいこと等から手軽に扱える超軽量タイプの紙粘土を用いることとした。

そして、型となるものも幼児と児童で同じ材料を使用させることにした。いずれも身近で手に入れることができ、型押しをしたときの形が変化に富むものを選択した。使用した材料は、次のものである。

S字フック、フィルムケースの蓋、ペットボトルの蓋、洗濯バサミ、貝殻、ビー玉、木の実、連結フック、各種ネット、カーテンフック、気泡入り緩衝剤、ストロー束、葉っぱ、コンセントカバー、ハトメ

方法的には紙粘土を伸ばし、そこに型押しをする。そして型を押した紙粘土に絵の具を塗り、その形を紙に写し取るという活動を想定した。

## 類似題材による実践

### 1. 幼児の型押し遊び

型押し遊びを題材とした幼児の造形活動は、以下のように行った。

実施日時 平成23年7月8日（金）

13:30～14:30（60分間）

対象幼児 美作大学附属幼稚園特別教室・絵画造形教室受講園児22名

年中児6名（男児4・女児2）

年長児16名（男児10・女児6）

題 材 名 「のばして ペったん」

指 導 者 中田 稔 ・補助教員2名

ね ら い 紙粘土の感触を楽しみながら、薄くのばしてできたものに様々な材料で型押しをし、できた形を紙に写し取る活動を通して、身の回りの物の形に興味を持ち、見立てを楽しむ。

準 備 物 紙粘土、絵の具、和紙、型押し用材料、刷毛、粘土板、のし棒、新聞紙、タオル

活動の流れ

- 1 指導者の話を聞き、活動に興味を持つ。
- 2 紙粘土をのし棒で薄くのばし、型押ししてみたい材料を選んで、思いのままに型押しを楽しむ。
- 3 型押しをした形を紙に写す方法や、写すときのきまりを知り、版に絵の具を塗り、紙に刷る。
- 4 紙に写し取った形をみんなで見合いながら形からイメージする物を自由に話して見立てを楽しむ。
- 5 片付けをする。

活動の様子



写真1 紙粘土をのす



写真2 絵の具を塗る



写真3 活動例1



写真4 活動例2

## 2. 児童の型押し遊び

型押し遊びを題材とした児童の造形活動は、筆者も所属する T 市内の民間教育サークルの協力を得て、夏休み期間中にワークショップ形式の募集を行い、3校の児童 12 名で以下のように行った。

実施日時 平成 23 年 8 月 21 日（日）

13:00～16:00（180 分間）

実施場所 T 市内ギャラリー

対象児童 ワークショップ参加者

T 市内小学校 12 名



3年生 3名(男児2・女児1)

4年生 3名(男児1・女児2)

5年生 4名(男児3・女児1)

6年生 2名(男児2)

題 材 名 「ぎょぎょっと、びっくり魚拓づくりにチャレンジ！」

指 導 者 いなば美育サークル指導者6名

ね ら い 紙粘土の感触を楽しみながら、薄くのばしてできたものに様々な材料で型押しをし、できた形を紙に写し取る活動を通して、身の回りの物の形に興味を持ち、見立てを楽しむ。

準 備 物 紙粘土、和紙、消しゴム、墨汁、筆ペン、粘土へら、色画用紙、展示用額、刷毛、容器、朱肉、のし棒、彫刻刀

活動の流れ

- 1 指導者から本時の活動の手順や材料について説明を受ける。
- 2 紙粘土をのし棒で薄くのばし、魚の形にする。
- 3 型押ししてみたい材料を選んで、思いのままに型押しを楽しむ。
- 4 型押しをした形を紙に写す方法や、写すときのきまりを知り、版に絵の具を塗り、紙に刷る。
- 5 作品名をつけたり手作りの印を押したりして額に飾る。
- 6 片付けをする。

活動の様子



写真5 魚の形を作る



写真6 インクを塗る

活動例



写真7 3年児童作品



写真8 4年児童作品



写真9 5年児童作品

## 実践の考察

今回の実践では共通の材料を基に、粘土に型を押す、押しした形を写し取るという共通の行為を行った。

幼児にとって、紙粘土を薄くのしたり、様々な型で型押しをするという経験は新鮮で、材料の形を試しながら楽しそうに活動していた。また、紙粘土に絵の具を塗り、紙版画のように型押しした形を写し取る場面では、刷り上がりを期待しながらそっと紙をめくる姿も見られた。紙粘土は固くならない限り何度でも型押しを繰り返すことができたので、子どもにとって安心して活動に取り組むことができ、何度も繰り返し型押しをするなど、「遊びこむ」姿が見られた。

児童の活動においては、普段の教室環境とは違い、初めての場所や指導者、さらに他校や他学年の児童も一緒である点など特殊な環境下での実践となったが、活動に対しては集中して取り組んでいた。それが、本題材が持つ遊びの楽しさに起因するのか、もともとワークショップに応募して来るような参加者のモチベーションの高さに起因するのか、あるいは普段とは違う環境による緊張感や期待感に起因するのか判断することはできない。ただ、紙粘土に型を押すという行為に限ってみれば、やはり幼児と同じように紙粘土の材料としての自由度や、繰り返す行為の楽しさに浸っている子どもが多かった。

また、幼児と同じ型を用いても、例えば幼児の場合は、洗濯バサミを使用したとき、側面を押し付ける行為のみであったものが、児童の中には、洗濯バサミの口の部分を開いて押し付ける等の工夫も見られた。さらに、幼児では型を押す力加減がわからずに自由に扱えなかったストローの束を、児童の場合は事も無げに扱い、くっきりとした型をつけていた。

児童の題材が、「幻の魚を作ろう」という設定であったことや、できた作品をギャラリーに展示するという企画であったことなどから、造形遊び本来の材料からの発想や、行為からの想像という点での問題点もあったが、今回初めて意図的に同一行為、同一材料での題材に取り組むことによって、遊びの要素を取り入れた

類似題材の開発の可能性も見えた気がする。ただ、普段の保育の中で、子どもが「遊びこむ」状態になったとき、子どもの遊びは次々に発展し、連続し、流動的である。今回の実践は、個人での活動だったので、遊びを通した他者とのコミュニケーションなどがほとんど見られなかった。今後の題材開発で検討していかなければならない課題である。

## おわりに

本実践は、遊びを通した幼児と児童の題材開発の糸口を求めて試みたものであるが、活動の詳細について記録したり分析したりすることが不十分であった。今後この試行の反省を基に、さらに遊びを通した題材開発に努めるとともに、個々の子どもの活動の様子についても記録、分析して幼児と児童の連携した題材について研究を深めていきたい。

## 謝 辞

本実践を行うにあたり、美作大学附属幼稚園ならびに、コミュニティプラザ百花堂、いなば美育サークル関係者の方々に厚くお礼を申し上げます。

## 参考文献・資料

- 1) 幼稚園教育要領の改訂においては「第3章 指導計画及び教育課程に係る教育時間の終了後に行う教育活動などの留意事項」の「第1 指導計画の作成に当たっての留意事項」の「2 特に留意する事項」において小学校の連携に係る内容が追加された。
- 2) 平成20年3月改訂「小学校学習指導要領」の「第1章総則 第4 指導計画の作成に当たって配慮すべき事項2(12)」による
- 3) 西村隆司「小学校教員の専門性と美術教育研究の方向性について」、『美術科教育学会誌』第27号、2006年、p293-p305